

精神分析のはなし 第14回 パートナーの発明

ジャック＝アラン・ミレール)

あなたがひとりの分析家に出会いに行くとき、あなたはひとりのパートナーと出会います。その人は新しいパートナーで、今までの人生で出会ったことがないうえ、あなたはその人とこれから新たな勝負をしようと思っています。この勝負が行われるためには、ふたりとも、つまりあなたとその人が一緒にそこに身をもって存在しなければなりません。

そしてこの勝負はもっぱらパロール（ことば）のなかでなされます。なぜでしょう？なぜ人は人生にこの勝負を加えるのでしょうか？このパロールのパートナーは一告白しておきますが一、この対話者は、ほとんど話しません。人生において人は自分のパートナーたちがいないと思う時、人はこの勝負をします。

もちろん、もし性的本能のような何かが存在するなら、物事はもっとシンプルだったでしょう。性的本能が人類において存在しているならば、もっとシンプルで、精神分析は存在しなかったことでしょう。なぜなら人は自分に問いかけることもなかったでしょうから。

あなたに必要なパートナー、好みのパートナー、標準的なパートナー、あなたに合うパートナーへと導き向かわせる盲目的な力、静かな力が存在したでしょうから。おそらくそれが理想なのでしょう。そのうえおそらく人は動物たちからセクシャリティーについての考えあるいは理想を作り出すことも可能です。人類において物事がなされるのはこのようにはではないのだ、と、知るために、精神分析家である必要はありません。人におけるセクシャリティーは、本能を経由していません。人間はそのパートナーにたいして、一直線に向かうわけではありません。迷宮全体、迷路、鏡からなる真の宮殿、袋小路というものを、人間は経由しなければなりません。そして人間のセクシャリティーは突然姿を現し、怪しいものであり、問題をはらみ、矛盾していて、とどのつまりは苦しいものだと言うことができるのです。

本能がないとしても、よりいっそう複雑な諸機能があります。欲望があり、享楽があり、そして愛があります。おまけにこの三つのものはすべて、互いに一致もしなければ調和もしない、良い人と考えられるパートナーに一致して向かうわけでもありません。たとえパートナーがよい人であるという確信を持てる場合であっても、そうなのです。

ではまず欲望について。欲望は本能 *instinct* ではありません。というのは本能とは「知っている」からです、たとえその知が不透明にとどまるとしても、です。本能はつねに同じことを静かに言う、本能は恒常的なものです。それとは反対に、欲望は「知りません」。欲望はつねにひとつの問いに結び付いています。欲望はそれ自体がひとつの問いです。それは、私が本当に欲望しているのはなにか？です。これこそが私の欲望なのだろうか？私の欲望はよい欲望なのか悪い欲望なのか、害をなすものなのか、禁じられているのか？私の欲望であると思っているものは、ひとつの幻影なのか？

そして欲望にかんするこの問いは困惑にいたることもあり、私を動けなくさせることもあります。したがって欲望は「知らない」ものです。もちろん私が要求するものが存在します。私が要求するものとは、私が欲望していると思っているものですが、本当に私が欲望しているものはそれなのでしょう？

また、本能とはちがって、欲望は恒常的なものではありません。欲望は不変のものでもありません。こう言ってよければ、欲望は断続的なもので、欲望は行ったり来たりします。それは循環し、ときおり散逸し、ときおり集中し、ときおりそれは消滅することさえあり、消えます。それで、「私は退屈する」、とか、「私は気が滅入る」、と言うわけです。私が非常に強くなにかを、誰かを、欲望する、こともあります。私がそれを得る、こともあります。とつぜん、それが私の享樂に提供されるときに、そして私がもうそれを享樂する以外ない場面で、欲望がそっと姿を消すのです。たとえ私がそれを享樂するとしても、具合は良くなるのでしょうか？何かあるいは誰かを私が享樂するたびに、私がそれへの欲望が減るということも起こり得ます。私が以前享樂したものが今やその価値が減っていることがあります。そしてそうであればあるほど私の欲望も減少するのです。

したがってもし私の欲望が激しいものだとしても、この激しさは私にも他者にも、恒常的でないかなる保証も与えません。欲望は移動しうるし、時間とともに衰弱したり弱まったりしうるからです。そして欲望は私にのみ由来するものではありません。本能は、そうです[私にのみ由来します]。本能は私の本性に記載されていると想定されていて、自動的に機能するものと想定されています。しかし欲望の場合は違います。欲望は諸事情、状況に依存していて、とりわけ欲望が向かう<他者>に、依存しています。

私の欲望は<他者>の欲望に結ばれていて、それも色々な仕方でそうなっています。私の欲望は<他者>の欲望であることもあり得ます。そのとき私が欲望する、私の番を迎えるためには、<他者>が欲望しなければなりません。そのとき私は欲望するために、<他者>の欲望のサインを探らなければなりません。つまりそれは<他者>が欲望するものを欲望することを意味しているのかもしれませんが、<他者>が欲望するものに私を適合させることを意味するのかもしれませんが。しかしそれは私の欲望がちゃんと自分の欲望であるために、私が自分自身であるために、<他者>が欲望するものとはべつのもを私が欲望しなければならぬことも、意味しているのかもしれませんが。私が<他者>自身の欲望において消え去らないために、です。

欲望する<他者>、それは私をそそのかし、誘い、私のなにかを欲し、私のルーチンにおいて私の邪魔をします。この<他者>を私は憎んだり、絶滅させようと欲望したり、その出現を嫌ったり、そのしるしを消去することを欲望したりすることもあります。

また、さらに、<他者>の欲望において私の欲望にとってのひとつの羅針盤を見つける、べつの仕方もあります。<他者>がひとつの障害、限界、法を置いたり、<他者>が禁じ

たり、〈他者〉が「これは欲望してはならない」と言ったりするとき、私はどこに欲望が存在しているのかが分かっています。私はその時、欲望できるものが罪のあるものであること、人が権利を有していないもの、禁じられているものであることが、分かっているのです。

もちろん例をいくつかあげることもできるでしょうが、そのつもりはありません。例というのをあげるのは、あなたがやればいいでしょう。というのはみんな各自、私がここで述べていることについて、今言ったこととかまえに話したこととか、ある側面やべつの側面において、自分の姿を認められるでしょうし、さらに近い人やパートナーの姿を認めることもできると考えるからです。そうです。これらの描写のなかに、たとえそれがほめかされたものであれ、人は自分と他者の姿を認めることができます。それはまさに欲望が、〈他者〉のしるしにたいして超絶的に敏感な、ひとつの絆でありひとつの関係だからです。なぜなら欲望は一方から他方へと移り、互いにやりとりし、互いに入れ替わるからです。それはおとりの鏡（罨）でもあり、欺くものです。

しかし、欲望とはべつのものも存在します。享樂があり、まさにこの水準で、人は自分の姿を認めることができないのです。この水準では、人は、それが同性であれ異性であれ、人間的なパートナーを持っていません。ここには、ひとつの要請があり、それは休みのないもので、フロイトの用語において、欲動と呼ばれています。それは命令的で絶対的なひとつの要求であり、言葉で定式化されず、満足を知らないものです。つねにより多くを望み、限界も不活動の時も知らないものです。

欲動は顔を持たず、頭部もない、無頭的なものです。それは他者の誰にもへばりつくのでもありません。欲動は、その人自身で享樂できるような身体にする、あるなにかを手段として、自分自身のなかで完遂したり堂々巡りしたりすることにしか努めないものです。欲動に必要なのはこのあるなにか、であり、これがなければ不安が生じます。フロイトはそれをまず身体のさまざまな断片のなかに認めたのですが、身体のこれらの断片がルアー、みせかけによっても置き換えられるということにも気がついたのです。

このルアーとはいったいなんでしょう？ それこそまさに生地のちょっとした切れ端であり、子どもが眠るために懇願し、不思議なことに子どもをおとなしくさせるものです。しかしルアーはもっとも洗練された芸術の対象でもありえ、あるいはもっとも最新のテクノロジーの対象でもありえます。そしてそれが各自にとっての本質的なパートナーなのです。しかしこの対象は人間ではありません。この対象は非人間的であるか、むしろ人間性を欠いているもので、性的なパートナーとはまったく違います。おそらくこれは異様なことでしょうが、それこそまさにフロイトが発見したものであり、分析において人がもう一度発見するものなのです。つまり、欲望の側面と、享樂の側面とが存在し、これらふたつの側面は本質的にぴったりとはまることはないということです。このふたつのあいだには深淵、裂け目が存在しています。いわゆるエロティスムというものはひとつのピース全体ではありません。エロティスムは分割されているのです。

幸いなことに、享樂と欲望のあいだに、愛が存在しています。愛は、それらすべて一緒に長持ちするのだと信じることを可能にします。欲望にとって必要な性的なパートナーが存在する一方で、享樂にとり人間性を欠いたパートナーが存在します。愛のおかげで、それらはひとつになるしかないのだと信じられるようになり、さらにあなたのパートナーとあなたはひとつになるしかないのだと信じるができるのです。そしてさらに、愛によってあなたは人間を超えたパートナー、神性の、神そのものを得たり創り出したりすることも起こるのです。

ただし愛とは、運しだいのもので、愛はつねにひとつの出会いに依存していて、決してあらかじめ書かれているものではありません。欲望と享樂、愛のみつつが組み合わさる仕方は、各自にとってとても特別なものであり、それは偶然に依存します。私たちは精神分析によってその経験をしています。セクシャリティー、性との関係は、各自にとってひとつの出会いや不確実性、ある種の偶然によって決定されていることを、人はつねに明らかにして終わります。そしてまさにあらかじめそれが書かれているのではないからこそ、人はその一般的な定式、すべての人にとって有効な定式を与えることができないのです。この点で、人類における性的関係にかんして、科学は棄権をするに違いありません。この点では、事物の現実において、現実界において、記載された定式、つまり性的関係が従っているであろう定式を、見つけることは不可能なのです。この世のすべての事物は、惑星であれ動物であれ、すべきことを知っているようです。前者にとっては重力の定式があり、後者にとっては本能の定式があります。しかし男と女のあいだの性的関係は、プログラムされていないし、ひとつのプログラムのなかにあらかじめ書かれているのでもないのです。

それでは欠けている定式のかわりに、なにがあるのでしょうか？まったくの多様性というものがあります。人間のセクシャリティーには、予測不能な多様性があるのです。愛の出会いがあったり、欲望の諸反復があったり、享樂のトラウマがあったりします。そしてこれらの出会い、これらの反復、これらのトラウマはつねに驚きに属しています。予測不可能で、教育学も役に立たない、もちろん予防もなにもできません。他者との性的関係はあらかじめ書かれていない、それは発明されるものだからです。カップルにおいては、つねに発明する一部分があるものです。おそらくそこで作動しているひとつのロジックというものがあるでしょうが、しかしそれは普遍的なものではなく、各自に個別的なもので、人はただ事後的にそのロジックを再構成することができるだけです。

このロジックとはどんなものなのでしょうか？もしこう言ってよければ、性についてのプログラムがないということに対して、各自がうまくやっていく仕方のことでしょうか。人は斜めからしかそれとうまくやることはできません。ある種のしくじり、つまりひとつの症状をもってしか、うまくやることはできないのです。性的な関係であろうものがある人にとって確立されるたびに、それはつねに症状的なものなのです。ひとつの絆、結合というものは、実際にはいかなる規範やいかなる正常にも対応していません。規範、正常とは、うわべのことではしかありません。その背後にあるもの、その背後にあるもっとも現実的なものとは、症状です。もちろん人が治ることができる症状、使うのをやめられる症状というものもあれば、除去することのできない症状というものもあり、それが性的関係の症状で

す。この治癒することのない症状は、セクシャリティーにおいてそのままあらわれますが、本当のことを言うとそれに解決を与えることはできません。それは謎にとどまります。ただ人はそれとともにやっていくことができるだけです。精神分析をするとは、あなたが性的な謎と出会った仕方の輪郭をとり、それを浮かび上がらせ、孤立させることです。あなたの無意識がこの謎を解釈する仕方を解明すること、そしてそれと一緒にやっていく最良の仕方を見つけることなのです。